▼研究ノート

第一次世界大戦前後におけるドイツ社会主義の思想的拡大

――「倫理的自由主義者」レオナルト・ネルゾンの事例をもとに――

鈴木健雄

1　はじめに

第一次世界大戦前後で、ドイツの社会主義のあり方は大きく変わった。ドイツ社会民主党（ＳＰＤ）の分裂と、ドイツ共産党（ＫＰＤ）の創設に伴う二大社会主義政党の成立及び、「分派政党（Splitterpartei）」と称される小規模な社会主義政党・グループ[1]の成立といった組織面での変化と並び無視できないのが、大戦以前は社会主義を標榜していなかった人々の、社会主義陣営への参入とそれに伴う人的・思想的変化であった[2]。

本稿が対象とする哲学者レオナルト・ネルゾン（Leonard Nelson）もまた大戦を経て新たに社会主義を標榜した人物である。それ以前、彼は左派自由主義政党に属し、ゲッティンゲン大学で哲学研究、教育に携わる傍、同地の自由主義運動のなかで中心的な役割を果たしていた。史的唯物論に対する激しい批判者だった彼は、大戦の末期に突然社会主義者であると宣言し、戦後はＳＰＤと関係をもった。一九二六年に彼が興した社会主義政党、国際社会主義闘争同盟（ＩＳＫ）は、その前身組織、国際青年同盟（ＩＪＢ）とともに、先述の分派政党の代表的な組織として、今日知られている[3]。

ドイツ社会主義史の文脈でネルゾンが着目されるとき[4]、もっぱら「倫理的社会主義（Ethischer Sozialismus）」の思想と一九五九年に制定されたＳＰＤの新綱領ゴーデスベルク綱領との関係性が検討対象とされてきた。倫理的社会主義とは、新カント主義に端を発する、人々の平等と公正さを強調する立場で、社会主義の基礎に階級や唯物論的な価値観、歴史的必然性といったものではなく、実践哲学上の必要性、すなわち倫理を置く思潮のことである[5]。なかでもネルゾンは、新カント主義の哲学者ヤーコプ・フリードリヒ・フリース（Jakob Friedrich Fries）の哲学から刺激を受けていた[6]。

この倫理的社会主義の思想をネルゾンから受け継いだとされるのが、彼の死後、一九二八年から一九四五年までＩＳＫの代表を務めたヴィリ・アイヒラー（Willi Eichler）であった。彼は今日「ゴーデスベルク綱領の父」として知られている[7]。すなわち、基本綱領委員会委員長だった彼は、「自由と公正、連帯を社会主義理念の基本的価値とし、同党が精神の自由の党であり共通の倫理的な基本価値と同一の政治目標に基づ

く様々な思想信条をもつ人々の共同体である」とする「社会主義の基本的価値」と題された一章[8]が、綱領の冒頭に盛り込まれる上で、主導的な役割を果たしたとされている。同章は、路線対立を抱えてきた同党を倫理的に基礎づけ、まとめ上げる役割を果たしたとして、同党が「国民政党（Volkspartei）化」したことを示すシンボルとして理解されている[9]。そこでは、ネルゾンの倫理的社会主義の思想が、戦後のヴァイマル期を経て、第二次世界大戦後のＳＰＤの基本思想に繋がったと理解される。

しかしその一方で、ネルゾンの思想には、社会主義者としては理解し難い要素が含まれていた。例えば「指導者原理」に基づく反議会制民主主義の思想や、反キリスト教会の思想、そして反史的唯物論と社会主義のドグマ化の拒否などである[10]。それらは「常軌を逸した理念[11]」として切り捨てられるか、もしくは括弧に入れられ十分に検討されないという傾向があった[12]。ネルゾンの「社会主義者」としてのプロフィールが自明視され、ヴァイマル共和国期以降の社会主義のあり方を前提として、ネルゾンの主張が捉えられているという問題が存在している。

ネルゾンはそもそも左派自由主義陣営に属する哲学者であり、反史的唯物論という点ではＳＰＤの党方針からは明確に距離を置く人物であった。問われるべきは、なぜネルゾンは「社会主義者」となったのかという点、そして、それが、同時期の社会主義陣営の思想的拡大という点からどういう意味を持ち得たのかという点だろう。ネルゾンの思想的発展を追っていく必要がある。

この問いを検討するにあたって、本稿では、史料として、主にネルゾンによる同時代の論考・講演録[13]と、彼の日記をその弟子の一人ブレンケが翻刻・出版したもの[14]、そしてネルゾン並びにＩＪＢの関係者が同時期に出版した同時代文献を用いる。

2　ネルゾンと「倫理的自由主義」の立場

ネルゾンは、ベルリンの裕福な同化ユダヤ人の家庭に、一八八二年に生まれた。父は同市の法律顧問官を務めた法律家だった。母方の祖父は、ドイツ自由思想家党（Deutsche Freisinnige Partei）で帝国議会議員を務めた人物だった。父母ともにプロテスタントに改宗しており、大学教育を受けた文化エリートという、典型的な教養市民層家系の出身であった[15]。

一九〇一年にアビトゥーアを取得した彼は、ドイツ各地で学んだのちゲッティンゲン大学で一九〇四年と一九〇九年に、博士号と教授資格を取得した[16]。前述のように、ネルゾンは哲学者として新カント主義の潮流にあり、当時「忘れられた哲学者」とされたフリースの思想の掘り起こしと探究、その思想を元とする独自の哲学体系の構築に取り組んでいた[17]。一九〇九年にゲッティンゲン大学の私講師となり認識論や倫理、教育学、宗教哲学の授業を担当した。一九一九年に員外教授となった[18]。

ネルゾンが左派自由主義の政治運動に関わりを持ち始めたのは、一九〇七年の頃である。翌年彼は、自由思想家連合（Freisinnige Vereinigung）に参加し、また、複数の自由主義諸勢力による組織である、自由ドイツ国民協会（Nationalverein für das liberale Deutschland）[19]にも参加した。そこでの活動は彼にとって、フリース思想の探究と並ぶ「もう一つの仕事[20]」であった。

ネルゾンは自由思想家連合で、今日「中欧論」で知られるフリードリヒ・ナウマン（Friedrich Naumann）と交流をもった[21]。また、自由ドイツ国民協会では、著名な左派自由主義者でその総書記ヴィルヘルム・オール（Wilhelm Ohr）とも交流した[22]。一九一〇年には、同協会に所属する地域組織で学生団体でもあるゲッティンゲン・アカデミック自由同盟

（Akademische Freibund）[23]の代表に就任するなど、同市を中心に、左派自由主義運動のなかで頭角を現した。

この時期、彼が必要性を訴えたのが自由主義の哲学的な基礎づけであった。一九〇八年一一月の「自由とは何か」と題する講演で彼は、経済的な自由主義が促された結果、「常に増大する経済的な搾取と自由を失った大衆」が目下生まれているとし、社会的・経済的不公正の拡大を問題視した[24]。この社会的・経済的な不公正の是正という関心は、当時の左派自由主義者のなかでも広く共有されていた[25]。彼の独創性は、哲学的な思索のもと、自由主義がなぜ必要かを見定めようとしたことにあった。ネルゾンは、本来自由をもたらすはずの自由主義が個人の自由を奪うといった「理論と実践の間に存在する矛盾」が生じる理由として、自由主義の必要性が十分に検討されていないことを挙げた[26]。そしてその根拠が見定められていないが故に、理論上は生じるはずの公正さや個々人の独立といったものが、現実には「教条主義」や「日和見主義」によって毀損されているとした[27]。

ネルゾンによれば、自由主義とは自由に向けての努力である。しかし、「自由」とは多義的なものである。誰かの自由が別の誰かの自由を制約する以上、ルールが必要となる[28]。そこでもちだしたのが、フリースの思想であり、人間理性の存在だった。ネルゾンによると、理性とは「全ての人々が自身のなかに見つけ、全ての人々に共通するもの」だった。そしてそれが故に、理性こそ、自由主義のルールすなわち「法（Gesetz）」になるというのである[29]。

実践理性に対する批判を通じて、理性と倫理の関係性の定式化に先鞭をつけたのは、カントであった。しかし、彼の場合、理性の先験性は指摘されつつも、理性が命じる意思がなぜ最高善と合致するかという問いに対しては、「霊魂の不滅」と「神の現実存在」という宗教的な前提を置く必要があった[30]。対してフリースは、理性の先験性を認めるとともに、最高善を認識するための超越論的な認識それ自体は経験的な仕方で獲得しうるとし、それを可能とする哲学的な諸認識が、理性にあらかじめ内在されているとされた[31]。そのため人は、理性を信じそれに頼ることによって「普遍妥当的な規範を認識」することができるようになると、ネルゾンは述べる[32]。その上で彼は、理性の働きのもと、定言命法的に定められた法によって個人の尊厳が守られる社会こそが、自由主義の目指す社会だとした[33]。まとめるなら、ネルゾンの求める自由主義は、万人が備え万人に共通する理性の存在によって根拠づけられた、道徳的な要請に従うことが求められる自由主義であった。そのような倫理に基礎づけられ制限される自由主義こそ、彼のいう倫理的自由主義であったのである。彼がのちに唱える「倫理的社会主義」の思想と同一の構造・論理が見て取れる。

もっとも彼は、自由主義者を自認しており、一九〇七年の国政選挙で一部の自由主義者がＳＰＤに投票したことを難じるなど、社会主義勢力とは距離をとっていた[34]。彼の教養市民層としての出自と所属する自由主義的なミリューの存在とともに、その強固な反史的唯物論の思想と、労働者ではなく教養を備えた人々（Gebildeten）、すなわち教養市民層や大学人（Akademiker）を社会変革の主体として捉える認識が影響していたと考えられる。

ネルゾンにとって、人の理性は絶対であり、理性が人の判断や行動に制約をかけることはあっても、外部に存在する権威によって理性が制約を受けるということはあってはならなかった[35]。そこで教会と並び批判の対象となったのが、史的唯物論だった。ネルゾンは、史的唯物論を「自

然科学的な世界観」に基づく歴史主義であり、「ドグマ」と否定する。そこでは答えが予定されており、理性はもはや意味をもたず、人は思考することをやめ外部の権威に身を委ねることになるというのである。[36] この批判は、哲学的な論争を背景に行われたものだった。[37] しかし、運命決定論としての歴史主義、人間の主体性を否定するものとして物質主義、両者を否定したという点で、当時のＳＰＤの党是とは相いれないものであった。

シュタインベルクの古典的研究が示すように、一九世紀末から二〇世紀初頭のＳＰＤ内部において「史的唯物論」という言葉でもって指される思想は、自然科学的＝ダーウィン主義的な進化論と混ざり合い、一種の宿命論として理解されていた。すなわち発展は自然必然的なものであり、資本主義的な社会秩序はいずれ必ず没落し、その先には種々の問題が存在しないユートピア的な世界が自ずと訪れるというのである。[38] 彼が「俗流マルクス主義」[39]と呼ぶこの理解は広く普及したものであり、エドゥアルト・ベルンシュタインら修正主義者によるもののように、批判の声は党内で一部みられたものの、少なくとも第一次世界大戦終結時までは、党の公定理解とされた。こうみたとき、ＳＰＤがドイツの社会主義を代表するなか、ネルゾンがあえて社会主義を標榜するのは、考えづらいことであった。

ネルゾンが当初、社会変革の担い手として期待を寄せたのは、主に教養市民層の青年だった。[40] 彼によると、万人が先験的に共通して備える理性ではあるが、人が外部からの権威や個人の傾向性を離れて最高善を認識するようそれを行使できるようにするためには、理性行使の方法たる「心術（Gesinnung）」を、なるべく早期の段階から鍛錬する必要があった。[41] そこでまず必要とされたのが、哲学教育だった。ギムナジウムそして大学で哲学を学んだ経験をもつ若者たちは、その条件に合致していた。哲学教育を受けた人々が社会と国家の方針を決めるという、プラトンが『国家』で示したような思想がここでは示されていた。[42] 対して、大戦以前の段階で、ネルゾンが労働者層に対して同様の期待を寄せた痕跡は、管見の限り見られない。彼はあくまで、当時の社会秩序の枠内で自由主義の刷新と、その先に繋がる社会改良を求めていたということができよう。[43]

彼が、行動主義を選択するとともに、自由主義陣営から身を離し社会主義を自称する契機となったのが、大戦とその後に続くロシア革命の成功とソヴィエト・ロシアの成立、そしてドイツ革命であった。なぜ彼は社会主義者を自認することになったのか、次章で検討する。

3　自由主義から社会主義へ

一九一八年一一月一一月、キール軍港での蜂起の一週間後、ドイツと連合国の間で休戦協定が結ばれたこの日、ＩＪＢは新しい「基本方針」を発表した。そこでは以下のように宣言された。「我々〔ＩＪＢの構成員：著者、以下同〕は、今日の自由主義諸政党のいう意味での自由主義者ではない。残念ながらそれらの諸政党が、自ら改良することがないことは証明されてしまった。〔中略〕社会主義に対立しているようにみえかねない全ての行動を我々は避けてゆくつもりである。ネルゾンは実際のところ社会主義者なのである」。[44]

ネルゾンが「社会主義者である」という宣言とともに注目すべきは、彼らＩＪＢの構成員が、もはや自由主義陣営に属さないと宣言されたことである。社会主義者を自認する上で、なぜ自由主義との決別まで宣

言される必要があったのか。以下考察する。

（1）第一次世界大戦の勃発と、戦後の社会改革の求め

一九一四年の七月に至るまで、ネルゾンは学者、教育者として精力的に活動を行なっていた[45]。同年七月下旬にロシア帝国がオーストリア＝ハンガリー帝国国境に動員を行なった際、彼は当面のところ深刻な問題には発展しないだろうと予測した[46]。しかしドイツがロシアに宣戦布告し、その後連鎖的に戦線が拡大するなか、ネルゾンは、開戦後わずか一ヶ月の間に「国家連合（Staatenbund）設立とそれに伴う内政改革に関わる覚書」と題する論考[47]を書き上げた。

同覚書で彼は、この戦争がドイツの勝利に終わるという予測を示すとともに、平時では実現できない「大規模な改革をおこなうための千載一遇の機会[48]」であるとし、ドイツを中心とする新しい国際秩序たる「国家連合」の創設と、国民の権利拡大や社会福祉制度の充実[49]といった五項目に亘る内政改革の実現を求めた。同覚書は、一五〇部印刷され、当時の著名な政治家、言論人に対して郵送された[50]。

戦争を機に内政改革が進むという期待は、教養市民層や自由主義者のなかでも広く共有されたものだった[51]。しかし、ネルゾンの国家観と指導者教育論がまとまって示されていたという点で、同覚書は注目に値する。そこで彼は、改革の一環として民主化と社会化の必要性[52]を述べた上で、理性を適切に行使でき、正しい判断を可能とするだけでなく「必要とあらば公的世界で公に行使できるような実行力を備えた」指導者の必要性を指摘した[53]。そして、指導者育成のために「哲学的、とりわけ倫理的な教育を通じた、心術の陶冶」とその行使の訓練が必要であるとした[54]。指導者候補として期待されたのが、ここでもやはり「教養を備えた人々」であり、特に青年運動に集った若者たちであった[55]。

（2）ネルゾンと青年運動

ここでネルゾンと青年運動の関係性を整理したい。彼はゲッティンゲンの青年運動組織「アカデミック義勇団（Akademische Freischar）」の主要構成員の一人だった。それは、ブルシェンシャフトを始めとする既存の学生組合のあり方が時代にそぐわないとし、代わるものとして一九〇七年に設立された学生組織であり、その設立者は、ハンブルクでヴァンダーフォーゲルを経験した、ゲッティンゲン大学の学生たちであった[56]。

一九一三年一〇月、カッセル南部のホーアー・マイスナー山で、自由ドイツ青年ホーアー・マイスナー第一回大会が開催された。現在でもドイツ青年運動の転換点の一つとして認識されている同大会には、計一五のヴァンダーフォーゲル団体、学生団体、教育団体、生活改革団体が集まった[57]。彼らは、新たな青年、そして青年組織のあり方を求めて集まった。大会の発案者クヌート・アールボーン（Knud Ahlborn）を代表とする同義勇団は、中心的なグループの一つであった[58]。

大会の記念冊子には、当時の青年運動関係者、知識人らが大会に対して贈った賛辞が掲載されている。ネルゾンもまた、そこに寄稿した[59]。彼は、自由ドイツ青年のなかに「ドイツの青年の最良の部分による力と自立性、健康と大いなる勇気、その昂まりをみている」と述べ、青年の果たすべき役割として「人民（Volkstum）の刷新」の主体たることを掲げた。そして、既成の権力や支配的な構造に対して人々がそれを「無批判に信頼し意思なき恭順さを示す」なか、自らの理性を信じ人々の内面的な自由を守るべく既存の力に対して抵抗することこそが、道徳的な必要

性に基く青年の役割であるとした[60]。そして自由ドイツ青年は、そのような指導者を輩出する教育を担う組織たるべきとした[61]。

このような期待のもとネルゾンは、同時期、ゲッティンゲンを中心にして、青年運動諸団体との関係とその連携構築に腐心していた。大戦勃発直前の一九一四年七月二四日には、「当地では喜ばしいことに、学生団体（〔それは例えば〕自由学生組合、義勇団、教育諸集団、アカデミー同盟や女子学生団体）の左派ブロックが結成されつつある」と述べている[62]。先述の覚書で記された、教育を受けた若者による社会変革という楽観的な見通しは、このような青年運動に対する期待に裏打ちされたものだったといえよう。

（3）青年運動動員の試みと失敗

教養を備えた青年運動参加者を中心とした、世の中の刷新、社会改良というもくろみを困難としたのが、大戦の開戦直後から生じた青年層の大量動員と大量死だった。開戦の年の一〇月に彼は早くも、「〔青年たちによる〕組織の芽は、戦争の勃発によって残念ながら皆、無に帰されてしまった」という嘆きの手紙を両親に宛てている[63]。翌年には「一度獲得した教え子を引き留め、〔社会変革のための〕意志を強くもてるよう力付けることの〔中略〕際限なき難しさ」を語っていた[64]。すでに、友人や教え子のなかに戦死者が出ており、彼自身、動員の恐れを抱えていた[65]。

青年運動の参加者自体が国内から失われ、残ったものも現状への適応で精一杯となるなか、ネルゾンが青年運動関係者に対して、戦争終結のための行動を強く求めたのは一九一六年のことであった。

同年六月、自由ドイツ青年の臨時代表者大会が開催された。組織構成のあり方、活動方針が議題となるなかネルゾンは、青年運動諸団体が今こそ政治的問題に関与すべしと強く主張し、自由ドイツ青年が特定の目標の実現に向けた集団（Zweckgemeinschaft）であるべきという文言を綱領に盛り込むべきとの主張を行った[66]。この「特定の目標」とは「自由をめぐる戦いのほかない」ものだった[67]。そして政治行動に対する自由ドイツ青年の「受動的な態度」をして「奴隷たちの英雄」の「自己保身」と批判した[68]。この激しい批判は、彼が運動関係者に対して抱いていた期待の裏返しであると同時に、教え子や弟子が失われていくことに対する焦りから生じたものだったといえよう。

このような提言に対する自由ドイツ青年の主流派からの反応は、概ね否定的なものであった。元来、既存の文化政策に対抗して結成された自由ドイツ青年であったが、この時期、主要構成員の多くが従軍しており、議論に参加できる状態ではなかった。そのなかで、政治活動に「消極的」であると批判しつつ、ドイツ国内に残る一八歳未満の若年者に対して政治的決断を迫るのは悪質な扇動ではないかという、ネルゾンへの批判の声もまた強かったのである[69]。その後、彼が自由ドイツ青年の「受動性」を痛烈に批判した書簡が公開されたことで、彼は、所属するアカデミック義勇団でも孤立することになった。同年九月にアカデミック義勇団を除名され、彼は自由ドイツ青年との関係を失った[70]。

（4）二つの革命と労働者階級の青年への期待

既存の青年運動組織の動員に失敗し、自由主義運動の同志であったオール[71]を戦争で失うなか、ネルゾンは一九一七年四月、ＩＪＢの前身にあたる独自組織を設立した。その目的は「公的生活における理性の支配」を促進するべく、その「先兵（Vorkämpfer）」となる哲学的な教育を受けた政治的指導者を育成することであった[72]。

彼は、青年運動の「失敗」の原因の一つとして、目指すべき目標や実現のための方略を指し示す力を備えた指導者の不在と、現状変革の意思の欠如を指摘していた[73]。そして一九一六年にはすでに、自ら「小規模サークル」を作り、社会変革の意思と能力を備えた指導者を育成することを構想していた[74]。そこで作られたのが上記の組織であった。一九一八年春、同組織は、ＩＪＢへと改組された[75]。

ＩＪＢの設立当初、ネルゾンとその構成員はまだ「社会主義者」を称しておらず自由主義の流れにあると自認していた。一九一八年八月に発行された「新規参加者募集のための指導原理と解説」と題する文章で、彼らはあくまで「かつての自由主義に根ざしている」ことが確認された[76]。実際、その構成員の中心は、青年運動の参加者や彼の教え子といった教養市民層出身の人々であった。

この自由主義、青年運動の流れを汲んだ人々が、突如社会主義者であることを宣言したのが、先述の「社会主義者宣言」だった。一九一八年一一月一一日というそのタイミングを考えたとき、それがドイツ革命の勃発とそれに続く政治的激動を、直接的な要因としたことは明らかである。ただし、ネルゾンらはそれ以前から社会主義に対して思想的に接近していた。以下、接近の過程をロシア革命の成功によってネルゾンのなかで生じたレーニンの前衛党論への着目と、青年運動への幻滅と反比例して生じた労働者の青年に対する期待の増大、という観点から整理したい。

ネルゾンは、ボリシェヴィキ勢力のロシア革命での最終的な勝利をして、レーニンが『なにをなすべきか』[77]で表明した前衛党論の勝利と理解した[78]。すなわち、適切な教育を受けて育成された職業革命家によって労働者が指導され、その結果、革命が生じたというのである。

前衛党論は、ネルゾンの「指導者教育」とそれに基づく社会変革という思想とパラレルであった。そして彼が、教養市民層を中心とする青年たちの意思と主体性のなさに幻滅するなか、労働者階級出身の指導者という発想をもたらすものであった。

労働者階級の青年が、主体として期待されるようになったのは、ロシア革命後のことであった。一九一八年の論考でネルゾンは、マルクスの言葉を引用しつつ「社会を刷新するために、困窮しているものと、思考するもの、学問とプロレタリアートの連帯が必要である」と述べ、社会変革の主体として労働者階級を認めるようになった。教育とともに、重視されたのが社会全体のために「犠牲となる意思」をもつか、否かであった[79]。

同年、ＩＪＢの中心人物の一人が記した論考のなかでは、さらに進んで、教養市民層の青年に代わって、社会変革の主体としての役割を労働者階級の青年に期待する旨が記された。そこではまず、青年運動に集った青年たちの「偏狭なブルジョワ的思考」と「自己中心的な動機」が批判されたのち、それと対照させて、不正義との戦いにおいてより成果を挙げている存在として、社会主義者の青年が称揚された。その上で、今日、ＩＪＢが「社会主義者の青年と肩を並べようとしているのは、公正な社会への道のりは、社会主義を経てその目的地に繋がるからである」として、理想とする社会の途中に社会主義があることが示された。そしてそのような社会の実現のためには、「可能な限り多くの人々を仲間につけ組織する」べく「プロレタリアートの青年たち」を動員することが必要であるとされた[80]。

労働者階級の青年に対する指導者教育の必要性が語られたことも、着目に値する。仮に、労働者階級の青年が社会不正の根元からの根絶に取

り組んでいないという点で「十分にラディカルではな」かったとしても、それは彼ら自身の責任ではないとした上で、その原因として、生活の困難さから「十分な精神的な技能を与えられるための時間が許されなかったこと」が指摘された[81]。その上で、「能力のある指導者になる資質をもった人々は、全ての社会階層に存在し」「何もアビトゥーアを通った人々に限らない[82]」というのであった。当時の社会的・文化的・経済的エリート層と労働者階級との階層的な距離を踏まえるなら、教養市民層出身のネルゾンやＩＪＢに集った人々にとって、これは大きな転換だったといえよう。

この後、ネルゾン、そしてＩＪＢの構成員らは、社会主義者として活動を続けていく。そこでの基本的な思想は、理性を中心に人間の尊厳や公平性を求めるとともに、理性を行使するための教育を、指導者育成の観点から求める、実現しようとするという、「社会主義者宣言」以前の思想の延長線上にあるものであった[83]。

4　終わりに

本稿では、今日「倫理的社会主義者」として知られるレオナルト・ネルゾンが、第一次世界大戦以前に掲げていた「倫理的自由主義」の思想の内実を検討するとともに、自由主義者だった彼が、同大戦を経て、なぜ社会主義者を自称することになったのか、その経緯を検討してきた。その結果、従来「社会主義者」として理解されることの多かったネルゾンは、元々左派自由主義陣営に属し、人間理性の力に基づき道徳的な社会を構築するという、哲学的思弁に基づく左派自由主義の立場にあったこと、そして、第一次次世界大戦とロシア革命の勃発を機に、社会主義を標榜することになったことを確認した。

最後に、第一次世界大戦を挟んだドイツ社会主義の思想的拡大という観点からみて、ネルゾンの事例はどのような示唆をもたらしてくれるだろうか。重要となるのが、同時期生じた史的唯物論に対する懐疑的な態度の広がりと人間の主体性に対する着目である。

先述の通り、第一次世界大戦以前、史的唯物論はＳＰＤの党是であり、それに対する公的な批判は、修正主義論争以来、目立って存在しなかった。史的唯物論の機械論的・メシア論的世界観が公に批判されるようになったのが、同大戦の後半であった。青年社会主義者のような、青年運動の流れを汲む「右派」の人々が「マルクス主義者たちの古いイデオロギー的なドグマからの訣別を強く推し進めようと」する[84]とともに、ルドルフ・ヒルファーディングやジークフリート・アウフホイザーといった、ＳＰＤの理論家たちもまた、労働者大衆による自然発生的な革命という展望に対して疑念を示すようになった[85]。彼らはマルクス主義からの漸次的な離脱を試み、労働者階級以外の社会階層の積極的な取り込みを求めた。この議論は一九二一年に成立した「ゲルリッツ綱領」に繋がるものであった[86]。

人間の主体性を中心に置き、それを否定するものとして史的唯物論の排斥を求めるネルゾンの思想は、この思想潮流の一部を構成したものとして理解すべきであろう。すなわち、一度は廃れた、人間の主体性を基礎とする社会主義という思想を、ドイツ社会主義の外部、すなわち自由主義の文脈で練られた新カント主義の哲学から、その内部に再度組み込もうとしたのである。ＳＰＤの国民政党化の一過程がここに見て取れるのではないだろうか。この点については稿を改めて検討したい。

注

（1）例として、ドイツ社会主義労働者党（ＳＡＰＤ）や共産党反対派、ノイ・ベギネンが挙げられる。Jan Foitzik, *Zwischen den Fronten. Zur Politik, Organisation und Funktion linker politischer Kleinorganisationen im Widerstand 1933 bis 1939/40*, Bonn 1986.

（2）ドイツ民主党（Deutsche Demokratische Partei）所属の自由主義政治家パウル・ナータンやゲオルク・シューマー、アードルフ・グリムらの事例が、また、青年社会主義者（Jungsozialisten）のような青年運動にルーツをもつ人々の事例が知られている。Detlef Lehnert (Hrsg.), *Vom Linksliberalismus zur Sozialdemokratie. Politische Lebenswege in historischen Richtungskonflikten 1890-1945*, Köln/Weimar/Wien 2015; Stefan Vogt, *Nationaler Sozialismus und Soziale Demokratie: Die sozialdemokratische Junge Rechte 1918-1945*, Bonn 2006, S.80 ff.

（3）Foitzik, a. a. O.

（4）なお他の観点としては、哲学者としてのネルゾンに着目した研究や、教育者としてのネルゾンに着目したものが存在する。例えば、太田明「レオナルド・ネルゾンと〈理性の自己信頼〉（一）」『玉川大学文学部紀要』第五五号、二〇一四年、一〇五―一二九頁、太田匡洋「レオナルト・ネルゾンと『新フリース学派』の成立」『理想』第七〇三号、二〇一九年、五八―六八頁、寺田俊郎「レオナルト・ネルゾンのソクラテス的方法」『臨床哲学』第三号、二〇〇一年、六一―七二頁など。

（5）Walter Euchner, „Ideengeschichte des Sozialismus in Deutschland. Teil 1“, in: Helga Grebing u.a. (Hrsg.), *Geschichte der sozialen Ideen in Deutschland. Sozialismus – Katholische Soziallehre – Protestantische Sozialethik. Ein Handbuch*, 2. Auflage, Wiesbaden 2005, S. 319 ff.

（6）ネルゾンの思想について、詳しくは本稿第一章を参照。その他の倫理的社会主義の潮流については以下を参照。Helmut Holzhey (Hrsg.), *Ethischer Sozialismus. Zur politischen Philosophie des Neukantianismus*, Frankfurt am Main 1994.

（7）安野正明『戦後ドイツ社会民主党史研究序説――組織改革とゴーデスベルク綱領への道』ミネルヴァ書房、二〇〇四年。特に、二〇九―二一五、二五九―二六七、三四八頁。「ゴーデスベルク綱領の父」という呼称については、Thomas Meyer, „Willi Eichler – Vater des Godesberger Programms. Eine Erinnerung zum 20. Todestag“, in: *Die Neue Gesellschaft/Frankfurter Hefte*, 38 Jg., Nov. 1991, S. 1048 f.

（8）ズザンヌ・ミュラー（河野裕康訳）『戦後ドイツ社会民主党史』ありえす書房、一九八七年、二〇九頁。

（9）例えば、ペーター・レッシェ、フランツ・ヴァルター（岡田浩平訳）『ドイツ社会民主党の戦後史　国民政党の実践と課題』三元社、一九九六年、一五三―一五八頁。

（10）安野、前掲書、一二二―一二四頁。

（11）レッシェ、ヴァルター、前掲書、一五四頁。

（12）これは例えば、前述の安野やレッシェとヴァルターの研究のほか、以下のレムケ＝ミュラーの研究にもいえる。Sabine Lemke-Müller, *Ethischer Sozialismus und soziale Demokratie. Die politische Weg Willi Eichlers vom ISK zur SPD*, Bonn 1988.

（13）Leonard Nelson, *Gesammelte Schriften*〔以下、*GS*と表記〕Bd.1-9,Hamburg 1970-1977.

（14）Erna Blencke, „Leonard Nelsons Leben und Wirken im Spiegel der Briefe an

seine Eltern, 1891-1915. Material für einen Biographen", in: Hellmut Becker, Willi Eichler u. Gustav Heckmann (Hrsg.), *Erziehung und Politik. Minna Specht zu ihrem 80. Geburtstag*, Frankfurt a. M. 1960, S. 9-72.

(15) 以上、Holger Franke, *Leonard Nelson. Ein biographischer Beitrag unter besonderer Berücksichtigung seiner rechts- und staatsphilosophischen Arbeiten*, Hamburg 1991, S. 51 f.

(16) 博士論文と教授資格取得論文の題目は、それぞれ、『ヤーコプ・フリードリヒ・フリースとその最近の批判者』と『カント認識論発展史の研究』というものだった。Ebenda, S. 73 u. 99.

(17) 一九〇三年に彼が興した新フリース学派（Neue Fries'sche Schule）と称する研究会はその拠点の一つであり、周囲の友人や研究者、教え子がそこに参加した。Erna Blencke, „Zur Geschichte der Neue Fries'schen Schule und der Jakob Friedrich Fries-Gesellschaft", in: *Archiv für Geschichte der Philosophie*, 60. Band, 1978, S. 199-208.

(18) Franke, a.a.O, S. 102 ff. u. 137.

(19) 自由ドイツ国民協会は、南ドイツの自由主義者組織の結集を目指して一九〇七年に創設された団体である。Werner Link, „Der Nationalverein für das liberale Deutschland 1907-1918", in: *Politische Vierteljahresschrift* 5 Jg. Heft 4, Dez. 1964, S. 426 f.

(20) „Brief Nelsons an seine Eltern am 13. Jul. 1907", zit. nach: Blencke, a.a.O., S. 27.

(21) „Brief Nelsons an seine Eltern am 13. Jul. 1908", zit. nach: Blencke, a.a.O., S. 30 f.「中欧論」については以下をみよ。板橋拓己『中欧の模索――ドイツナショナリズムの一系譜』創文社、二〇一〇年。

(22) „Brief Nelsons an seine Eltern am 25. Okt. 1908", zit. nach: Blencke, a.a.O., S. 31. オールはもともと歴史学を修め、チュービンゲン大学の私講師を勤めていた人物である。自由ドイツ国民協会の設立に際して、綱領及び組織構造をめぐる議論に参加し、その後一九一〇年から総書記を務めた。Link, „Nationalverein", S. 425-433.

(23) ゲッティンゲン・アカデミック自由同盟は、既存の学生組合やブルシェンシャフトの団体を「立身出世主義的」かつ「硬直的」であると批判して成立した学生組織であり、ドイツ全土にある「自由同盟」の一つであった。Gerd Lüdemann und Martin Schröder, *Die Religionsgeschichtliche Schule in Göttingen. Eine Dokumentation*, Göttingen 1987, S. 43.

(24) Leonard Nelson, „Was ist liberal? (1908)", in: *GS*, Bd. 9, S. 6.

(25) Dieter Langewiesche, *Liberalismus in Deutschland*, Frankfurt a. M., 1988, S. 225 ff.

(26) „Was ist liberal?", S. 3-7.

(27) Ebenda, S. 4.

(28) Ebenda, S. 7.

(29) Ebenda, S. 9.

(30) E・カント（中山元訳）『純粋理性批判二』光文社、二〇一三年、一四五―一七二頁。

(31) „Was ist liberal?", S. 19-22.

(32) これをネルゾンは「理性の自己信頼の原則（Prinzip des Selbstvertrauen der Vernunft）」と呼んだ。Ebenda, S. 22.

(33) Ebenda.

(34) „Brief Nelsons an seine Eltern am 1. Jan. 1907", zit. nach: Blencke, a.a.O., S. 27.

(35) „Was ist liberal?", S. 9 f.

(36) Ebenda, S. 15 f.

(37) 彼の念頭には、カント以降の自然哲学からロマン主義、歴史主義、弁証法、唯物論という哲学的な流れがあった。Ebenda, S. 14 ff.

(38) Hans-Josef Steinberg, *Sozialismus und deutsche Sozialdemokratie: zur Ideologie der Partei vor dem I. Weltkrieg*, Hannover 1967, S. 59 f.（ハンス＝ヨーゼフ・シュタインベルク（時永淑、堀川哲訳）『社会主義とドイツ社会民主党――第一次世界大戦前のドイツ社会民主党のイデオロギー』お茶の水書房、一九八三年、一〇二頁）.

(39) Ebenda, S. 74 f.（同書、一三三―一三四頁）.

(40) „Was ist liberal?“, S. 2 u. 26.

(41) Ebenda, S. 24.

(42) Ebenda. なおネルゾン自身、ここでプラトンに言及している。

(43) 彼自身は、ナウマンをして「今日のドイツにおいて期待を寄せることのできる唯一の政治家である」とし、その改革姿勢に賛意を示していた。„Brief Nelsons an seine Eltern am 1. Jan. 1907“, zit. nach: Blencke, a.a.O., S. 27.

(44) „Richtlinien für unsere aktuelle politische Wirksamkeit vom 11. Nov. 1918“, zit. nach: Klär, a.a.O., S. 314.

(45) Franke, a.a.O., S. 109-116.

(46) „Brief Nelsons an seine Eltern am 29. Jul. 1914“, zit. nach: Blencke, a.a.O., S. 59.

(47) Leonard Nelson, „Denkschrift betreffend die Einführung eines Staatenbundes und der damit zu verbindenden inneren Reformen zum Behufe der Stabilisierung eines auf der Grundlage eines deutschen Sieges möglichen Friedenszustandes (1914)“, in: *GS* 9 Bd., S. 59-110.

(48) Ebenda., S. 65 f.

(49) Ebenda, S. 97-110.

(50) 三宅立「第一次世界大戦とドイツ社会」若尾祐司、井上茂子（編）『近代ドイツの歴史』ミネルヴァ書房、二〇〇五年、一六八―一六九頁。

(51) 送り先にはベルンシュタインも含まれていた。ズザンヌ・ミラーによる史料解説より。Ebenda, S. 60 ff.

(52) Ebenda, S. 89.

(53) Ebenda, S. 68.

(54) Ebenda.

(55) Nelson, „Vom Staatenbund (1918)“, in: *GS* 9 Bd., S. 56.

(56) 以上、アカデミック義勇団の設立経緯と特徴については、田村、前掲書、八〇―八一頁。

(57) 以下を参照。Barbara Stambolis u. Jürgen Reulecke (Hrsg.), *100 Jahre Hoher Meißner (1913-2013). Quellen zur Geschichte der Jugendbewegung*, Göttingen 2015.

(58) 田村、前掲書、八〇―八一頁。

(59) Leonard Nelson, „An die freie deutsche Jugend und ihre Freunde . Aufruf zum Fest auf dem Hoher Meißner Oktober 1913“, in: *Freideutsche Jugend. Zur Jahrhundertfeier auf dem Hohen Meißner 1913*, Jena 1913, S. 134-136. そこには、グスタフ・ヴィネケンのように青年運動関係者のほか、歴史家ハンス・デルブリュックや、哲学者パウル・ナトルプ、社会学者アルフレート・ヴェーバーといった同時代の著名な知識人が名前を連ねており、寄稿者は三〇名に及んだ。

(60) Ebenda, S. 134.

(61) Ebenda, S. 135 f.

(62) „Brief Nelsons an seine Eltern am 24. Jul. 1914“, zit. nach: Blencke, a.a.O., S. 59.

(63) „Brief Nelsons an seine Eltern am 30. Okt. 1914“, zit. nach: Blencke, a.a.O., S. 64 f.

(64) „Brief Nelsons an seine Eltern am 11. Nov. 1915“, zit. nach: Blencke, a.a.O., S. 71 f.

(65) „Brief Nelsons an seine Eltern am 12. Aug. 1914“, zit. nach: Blencke, a.a.O., S. 63 f. なお、その後、実際に動員されたのは一九一七年九月だった。ゲッティンゲン、カッセルの駐屯地での勤務後、不眠症や精神疾患を理由に翌年の二月に除隊となった。Franke, a.a.O., S. 138-143.

(66) Franke, a. a. O., S. 144 f.

(67) Leonard Nelson, „Eigene Verantwortung und innere Wahrhaftigkeit (Vier Briefe an die freideutsche Jugend)“, in: *GS* 8 Bd., S. 219 f.

(68) Ebenda.

(69) ウォルター・ラカー（西村稔訳）『ドイツ青年運動――ワンダーフォーゲルからナチズムへ』人文書院、一九八五年、一二四頁。

(70) Franke, a.a.O., S. 147f.

(71) オールは、政治的指導者を育成するための「政治アカデミー」の設立を目指していた人物であり、ネルゾンにとって政治教育という観点からも同志であった。Nelson, „Wilhelm Ohr als politischer Erzieher (1917)“, in: *GS* 8 Bd., S. 417-448.

(72) 組織設立時に中心メンバーであったミンナ・シュペヒトとベルタ・ギージンがおこなった演説より。Franke, a.a.O., S. 147.

(73) Nelson, „Eigene Verantwortung“, S. 222.

(74) Ebenda, S. 224.

(75) Klär, a.a.O., S. 313 f.

(76) „Leitsätze und Erläuterungen für die Werbetätigkeit vom 23. Aug. 1918“, zit. nach: Klär, a.a.O., S. 314.

(77) ヴェ・イ・レーニン（マルクス＝レーニン主義研究所訳）「なにをなすべきか？われわれの運動の焦眉の諸問題」『レーニン全集　第五巻』大月書店、一九五四年。

(78) Leonard Nelson, „Lebensnähe. Aus einer Rede, gehalten vor der Casseler〔原題ママ〕Arbeiterschaft“, in: *isk*, Jg. 1, Heft 5, Mai 1926, S. 85 f.

(79) Leonard Nelson, „Öffentliches Leben“, in: *GS* 8 Bd., S. 272 f.

(80) 以上、Klara Deppe, „Aufgaben und Gefahren“, in; Bertha Gysin (Hg.), *Der Völker-Bund der Jugend, Leipzig 1920*, S. 22-32. なお、同書に収められた各論考の執筆時期については、Gysin, „Einleitung“, in: dies, a.a.O., S. 5.

(81) Ebenda, S. 24-28.

(82) Ebenda, S. 32.

(83) 第一次世界大戦後のネルゾンらＩＪＢ／ＩＳＫ構成員の活動、思想については、例えば、安野前掲書、一二一―一二六頁、拙稿「ドイツ社会主義の「倫理的な基礎づけ」の起源に関する一考察――レオナルト・ネルゾンの哲学とＩＪＢ／ＩＳＫの政治的立場に着目して」『世界史研究論叢』第九号、二〇一九年、二三―四四頁。

(84) レッシェ、ヴァルター、前掲書、四四頁。

(85) 同書、四四―四五頁。

(86) 同書、四九頁。

※本研究はＪＳＰＳ科研費（19K13317）の助成を受けたものです。

（すずき　たけお・東京工業大学専任講師）